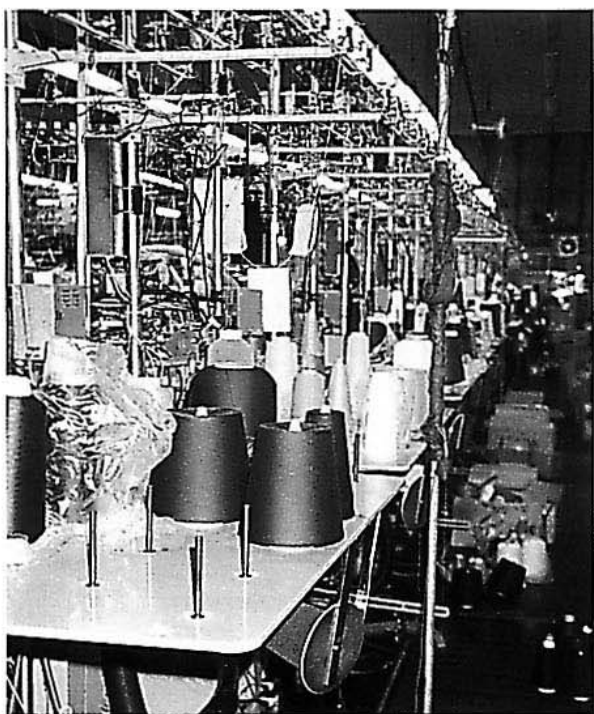


香芝の靴下 地場産業からの発信 タウンウォッチャー 米永繁夫(良福寺)



筆者撮影

わが国で、靴下が初めて機械で生産されたのは明治四年東京に始まり、奈良県では明治四十二年頃から始まったと言われている。香芝市では、大正八年に先駆者が旧陵西村(現大和高田市)や旧馬見村(現広陵町)から機械や技術を導入して、農家の副業として始まっている。戦後、新素材の開発や技術革新を繰り返しながら、仕上げや染色などの関連産業と共に発展し、日本経済の高度成長と共に昭和三十五年頃から四十年代前半にかけて、そのピークを迎えている。しかし、近年では国際化の中で、発展途上国からの輸入品との競争や消費者ニーズの多様化への対応の中で、産地

企業としての生き残りのための努力が続けられている。

現在、香芝市では奈良県靴下工業組合加盟の五十九社を中心に、その関連産業や下請け関係で産地業界を構成している。全国靴下生産量の約40%を占める奈良県の中にあつて、広陵町、大和高田市と共に、その主力を形成している。

しかし、業界内部にはいくつかの課題を抱えている。その最大のもは、経営規模が総じて小さく、経営基盤も弱く、大半が大手流通業者の下請けとしてOEM生産に止まっていることである。マーケットから来る製品価格の引下

げ要求と大手原糸メーカーからの原料高からの圧力の狭間で経営に苦慮されている。

その中にあるので、すでに自社ブランドで生産し販売を一貫して自社で行なっている業者もある。大半の業者は、

やりたくても単独では出来難いし、又そのリスクを負うだけの体力に欠けるというのが実態のようである。

業界の活性化については、昭和五十三年以来、五十九年、六十二年と三度に亘る「靴下産業ビジョン」の中で、いくつかの方向が示されている。日本の靴下産業は品質、格調、品種面において世界をリードする高い水準にあり、業界の自助努力によって活路を切り開いて行く必要があるし、切り開いて行けるとも指摘している。

その自助努力の方向の一つは、各社の個性化とその組合せによる「共同化」ではないだろうか。当初より先進地区である広陵町では「かぐや姫の町」「靴下の町」として地域ぐるみで地域振興と地場産業の発展を応援している。靴下では、すでに「かぐや姫」ブランドが生産されている。

香芝市でも、これからの発展方向について、個々にその対応が図られている。一つは製造と販売は、それぞれが特化して専門化する方が効率が良いとするもの。他は、苦勞は多いが、自分で価格を設定して販売する方向で取り組んでいるとするもの。もう一つは、産地ブランドによる共同化にその活路を見出したいが、現状では困難が多いとするもの。市民の立場からすれば、「産地ブラン

～タウンウォッチャー募集～

あなたも誌面づくりに参加してみませんか。

香芝遊学では、誌面をより充実させ、市民のための雑誌としていくために、広く市民の中から誌面づくりに参加していただける方を募集しています。

参加の方法としては香芝市企画課などで構成する編集局にタウンウォッチャーとしてメンバーとなつていただきます。そして毎号の誌面の中で香芝市の自然・歴史・文化・人・暮らしなどについて、考えることや思い、観察記録、小論などを原稿または写真などで表現していただきます。誌面の発表方法については、編集局のスタッフがお手伝いいたします。

参加をご希望される方は愛読者メールに必要事項をご記入の上、お申し込み下さい。(なお応募者多数の場合は、ご遠慮頂くこともあります。)

」の靴下が出来れば、靴下まつり等でもっと身近なものになるだろうし、靴下を通じて業界―行政―市民の一体感が更に高まるものと期待される。将来的には、香芝市が靴下を通じて「全地区」に発展して行くことも決して夢ではないと信じていたい。

(今回の取材に当たつて、ご協力いただいた団体・企業は次の通りです。改めてお礼申し上げます。奈良県靴下工業組合、黒松メリヤス(株)、佐野靴下、日本ニッポ(株)、三岡繊維(株)、三ツ星靴下(株)(企業は五十音順)